

展示されているゲルの中で。「どう、この生活スタイル。シンプル・イズ・ベストでしょう」—大阪府吹田市、国立民族学博物館（撮影・大森武）

羅 鳥洋

小長谷助教授は、モンゴルでは、草原は実際に豊かな地域だという。テロ以降、



いんたびゆ

總集委員

に富んだ遊牧という生活様式」などが、二十一世紀の文明の在り方を考えるヒントがあるといふ。

人々が家畜とともに広大な草原を移動して暮らす遊牧。「草と水を求めて、あてもなくさまよう」という見方はまったくの誤解で、実際は天然の牧草を活用した計画的な牧畜だ。農業よりも環境にやさしく、都市のような巨大な仕組みも必要としない。悠久の大地に息づくモンゴルの遊牧社会を研究する国立民族学博物館の小谷有紀助教授は、「分散型」で「持続可能性」

卷之三

卷之三

A black and white portrait of a man from the chest up. He has dark hair and is wearing a dark, high-collared coat over a light-colored shirt. The background is dark and textured.

卷之三

展示されているケルの中で。「どう、う」という大阪府吹田市、国立民族学博物館(日本)

遊牧はもう一つの文明

こながや・ゆき
1957年、大阪府生まれ。京都大学大学院修了。モンゴル国立ウランバートル大学に留学。モンゴル国や中国内モンゴル自治区で遊牧社会を調査。著書は「モンゴル草原の生活世界」(朝日選書)、「モンゴル風物詩」(東京書籍)など。

畜を追つて暮らす。家畜からとった乳製品や肉を食料とし、生活用具は徹底した天然素材です。私たちは「昔と変わらないから遅れている」と思いがちですが、逆に七百年も変わらない驚異的な持続性にこそ、『文明』の「古さ」がある

—私たちの都市型文明も今、サステナビリティ（持続可能性）が課題

「それに比べて遊牧社会はもともと『分散型』です。隣の家は二十キロ離れているというような草地で、遊牧民たちは土地に執着せず、自然環境に個々に適応して生きている。いつまでも一力している。といふまらないから、周囲の環境に致命的な破壊をもたらさない」

「環境問題は地域を超えて地球規模にまで拡大発電などの自然エネルギー

分散型、持続性に学ぶ

ここに記述されている遊牧た投資と成果の集積が、
民の暮らしを読むと、現都市を大きくする。しか
在の遊牧生活とほとんどし、その集積が自然環境
変わらない。ゲル（テンに負荷をかけ、破壊をも
ト型住居）で暮らし、家たらしている。ほどよ

「二十世紀の私たちの『文明』はいわば『集積型』でした。土地など一定のものに集中投資して、大きな成果や利益を

「この物語を語る。」
非常に高度な細かい技術
で暮らしが維持されてい
ることが分かる】

「成長・拡大を前提と
する市場経済とも対照的

ベストでしょ
しています。これまでの
ような暮らしや社会、環
境を維持するのが困難に
なつてきました。今日と
同じ日が明日も続くとは
かぎらない。変わらずに
いるということは、実は
大変な努力がいるわけで

ひとこと

小長谷助教授は、草原は実際に豊かな地感だという。テロ以降、フィールドワークを重ねてきた。物質も乏しく、過酷異質なものへの敵意が世界に広がっている。対立ではなく、学び合うことが未来を開く。私たちの「文明」が絶対ではないことを、まず知るべきだ。

人間の知の限界をよく知っている。定住・都市型文明によっている。例えば雨が適遊牧という二つの『文明』に、適当な時期に、適当に降らなければ、それこそ災害が対等なパートナーとなる。が、二十世紀とともに、自然になるわけです。厳しい自然に直面しているか、思います』

サステイナブルとは、余でいるという話ではありません。むしろお互いにと。モンゴルの遊牧民は、補い合う関係が望ましい。

性に学ぶ

「いえます」
—具体的に私たちが遊牧から学ぶものは
—「エコノミー（経済）」「遊牧文明」の持つ意味を感覚的に理解していくのでないでしょうか？

—や携帯電話などの情報にはならない

通信は、いずれも小型の
分散型技術といえます。心を動かされる日本人と
私たちの社会が集積型か少なくありません
分散型へと、文明史的「大自然や素朴な暮ら